

富山市埋蔵文化財調査報告 123

ひやくづかすみよし

富山市百塚住吉遺跡 発掘調査報告書

— 市道宮尾6号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(2)—

2002年

富山市教育委員会

ひやくづかすみよし

富山市百塚住吉遺跡

発掘調査報告書

— 市道宮尾 6 号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(2)—

2002年

富山市教育委員会

例 言

- 1 本書は、富山市宮尾3225-3番地外に所在する白塚住吉遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、富山市建設部道路課が行う市道宮尾6号線道路改良工事に伴う本発掘調査である。
- 3 調査は、富山市教育委員会埋蔵文化財センターの指導・監理の下で有限会社山武考古学研究所が担当した。
- 4 調査期間 現地調査 平成14年1月29日～平成14年2月14日
出土品整理 平成14年2月19日～平成14年3月15日
- 5 調査は、有限会社山武考古学研究所 桐谷優 小村正之が担当した。
- 6 調査及び出土品の整理にあたり、次の方々よりご協力・ご助言を賜った。また、地元宮尾町内のご協力を得た。記して謝意を表します。(敬称略・順不同)
(株)日本テクニカルセンター (株)野上建設興業 (有)新成田総合社
西村善藏 阿部信子 市川国子 太田久美子 藤田幹雄 蒲田礼子 川口紀子 坪井紀子 福田恵子
波辺知恵 石井百々子
- 7 調査で使用した略号・記号については下記の通りである。
HS：白塚住吉遺跡 SB：掘立柱建物跡 SD：溝 SK：土坑
- 8 出土品及び原図・写真類は、富山市教育委員会が保管している。
- 9 本書の執筆は、Ⅱの1を富山市教育委員会埋蔵文化財センター主任学芸員 古川知明、Ⅰ・Ⅱの2～Ⅳを桐谷優が行った。

目 次

Ⅰ 遺跡の位置と環境	1
Ⅱ 調査の経緯	4
Ⅲ 調査の成果	5
Ⅳ まとめ	11

写真図版
報告書抄録

I 遺跡の位置と環境

百塚住吉遺跡は、北陸本線 J R 富山駅から北西へ約 3.5km、富山港線越中中島駅から西へ約 2 km の富山市宮尾地内に所在し、ここから北方約 900m には国道 8 号線が東西に延びている。

遺跡地は、呉羽山丘陵から北に延びる神通川下流左岸の河岸段丘上に立地し、現況での標高は約 9.8m、遺構検出レベルでは約 9.25～9.40m を測る。

呉羽山丘陵は、富山県中央部に突出する最高 77m の丘陵性山地であり、富山平野を呉東（東側）と呉西（西側）に 2 分する。東側は急斜し、西側は緩斜して低い丘陵地となっている。

この丘陵一帯には、旧石器時代から近世に亘る多数の遺跡が存在し、富山市域でも遺跡の宝庫として知られている。

縄文時代の代表的な遺跡としては、国指定の北代遺跡がある。北代遺跡は、呉羽山丘陵の長岡台地に位置する中期中葉～後葉を中心とした集落跡で、住居跡が 70 棟以上確認されている。また、北代遺跡に先立つ中期前葉～中葉の北代加茂下Ⅲ遺跡では、北陸では初の発見となる柱列が二重に巡る掘立柱建物跡が確認されている。

弥生時代から古墳時代にかけては、杉坂古墳群や杉谷古墳群などの初期古墳が呉羽山丘陵の北と南の端に造営される。特に、丘陵南端に位置する杉谷古墳群では四隅突出型方墳がみられ、古墳成立期に出雲地方との強い相互関連が予想される。また、百塚住吉 D 遺跡では該期の遺物が多数に出土し、百塚住吉 B 遺跡では古墳時代後半の土器とともに碧玉製の太形管玉が採集されている。

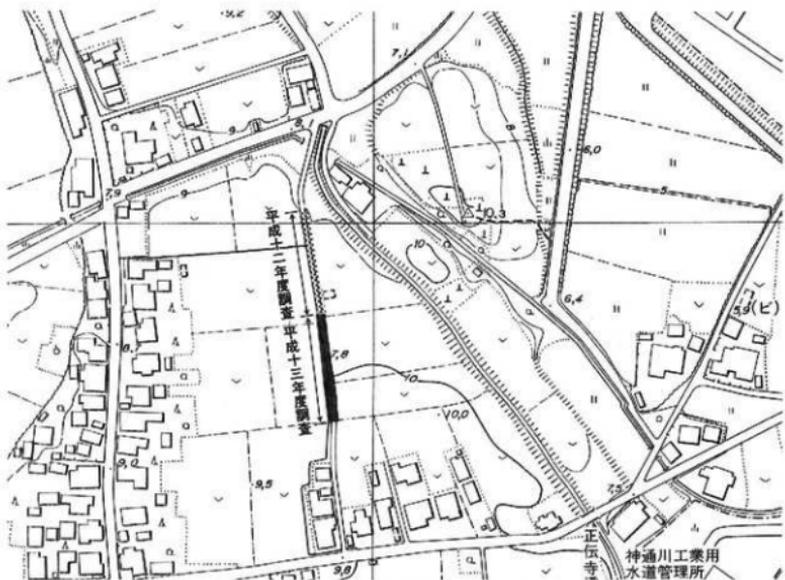
古代では遺構数が大きく増加し、百塚住吉 C・D・E 遺跡、長岡杉林遺跡、北代遺跡、八ヶ山遺跡、八ヶ山 A・B・C 遺跡などが知られる。北代遺跡が竪穴式住居や鍛冶遺構等で構成される一般的な集落であるのに対し、ここに近接する長岡杉林遺跡では、平安時代中期の祀堂と考えられる建物と共に瓦塔、緑釉陶器（輪・火舎）、灰軸陶器（碗）など仏教的要素の高い遺物が出土している。



第 1 図 百塚住吉遺跡位置図 (1/50,000)



第2図 明治43年測図 大日本帝国陸地測量部 (1:25,000)



第3図 発掘調査区域図 (1:2,500)

中世では、近隣の八ヶ山A・B・C遺跡、八町D遺跡などが散布地として知られているが、その詳細は不明であり、今後の調査に期待される。



- | | |
|-----------------------------------|------------------------------------|
| 1 百塚住吉遺跡 (縄文晩期、弥生～近世、集落跡) | 19 北代加茂下I遺跡 (縄文中期、散布地) |
| 2 百塚住吉B遺跡 (縄文、弥生～奈良・平安/集落跡) | 20 北代加茂下II遺跡 (平安/散布地) |
| 3 百塚住吉C遺跡 (縄文、奈良・平安/散布地) | 21 北代加茂下III遺跡 (縄文中期～晩期、奈良・平安/集落跡) |
| 4 百塚住吉D遺跡 (縄文晩期～晩期、弥生～中世、散布地・集落跡) | 22 北代加茂下IV遺跡 (奈良・平安/散布地) |
| 5 百塚住吉E遺跡 (奈良・平安/散布地) | 23 北代中谷遺跡 (縄文/散布地) |
| 6 百塚遺跡 (縄文晩期～晩期、奈良・平安/散布地) | 24 北代加茂神社遺跡 (縄文/散布地) |
| 7 百塚B遺跡 (縄文中期～晩期/散布地) | 25 北代大沼II遺跡 (縄文/散布地) |
| 8 百塚礎石 (奈良・平安/散布地) | 26 長岡小学校西遺跡 (縄文/散布地) |
| 9 八ヶ山遺跡 (縄文中期～前期、弥生後期/散布地) | 27 長岡杉林遺跡 (縄文早期～晩期、弥生後期～奈良・平安/集落跡) |
| 10 八ヶ山A遺跡 (縄文晩期～晩期、古墳～近世/散布地) | 28 北代遺跡 (日石跡、縄文早期～晩期、弥生、奈良・平安/集落跡) |
| 11 八ヶ山B遺跡 (奈良・平安～近世/散布地) | 29 北代東遺跡 (縄文中期、奈良・平安/集落跡) |
| 12 八ヶ山C遺跡 (縄文中期、奈良・平安～近世/散布地) | 30 狭沢富田町遺跡 (縄文晩期、奈良・平安/集落跡) |
| 13 八町遺跡 (縄文中期～晩期/散布地) | 31 北代新田遺跡 (縄文、奈良・平安/散布地) |
| 14 八町I遺跡 (弥生～近世) | 32 北代一万歩遺跡 (奈良・平安/散布地) |
| 15 八町A遺跡 (縄文中期、散布地) | 33 長塚跡 (奈良・平安/散布地) |
| 16 八町B遺跡 (縄文晩期、散布地) | 34 杉原吉塚跡 (古墳前期、古墳) |
| 17 八町C遺跡 (縄文中期/散布地) | 35 長塚寺古墳 (古墳/古墳?) |
| 18 八町D遺跡 (縄文晩期、中世/散布地) | 36 北代平野 (縄文/散布地) |

第4図 百塚住吉遺跡と周辺の遺跡 (1:12,500)

II 調査の経緯

1 調査に至る経緯

百塚住吉遺跡は、昭和51年3月富山市教委発行の「富山市遺跡地図」に初めて登載し、周知の埋蔵文化財包蔵地とした。(No41 百塚住吉遺跡包含地 土師器出土)

遺跡は平成9年に富山市建設部道路課が計画した市道宮尾6号線道路改良工事に伴い、平成9年に工事立会、平成12年8月に試掘調査を行って、延長107.5m、幅員6mの範囲に遺構の所在を確認した。確認された遺構には古墳時代の土坑・溝、平安時代の土坑・溝・畑跡がある。

協議の結果、道路路盤が遺構確認面を削平されているため、発掘調査を実施することとなった。発掘調査は北端から開始することとし、平成13年1月～2月に268㎡を実施した。平成13年度においては、12年度調査区の南側240㎡を引き続き調査することとなった。

調査の実施に当っては、市教委において十分な調査体制がとれなかったため、民間委託を活用して行うこととし、市教委の監理のもと、平成12年度は株式会社パスコ、平成13年度は有限会社山武考古学研究所が担当した。

(古川)

2 調査の経過

発掘調査は、平成14年1月29日から同年2月14日まで実施した。調査経過の概略は以下の通りである。

- | | | |
|----|--------|-----------------------------------------------------|
| 1月 | 29日 | 富山市教育委員会、富山市建設部道路課、地元区長の立会のもと、調査区域を設定する。 |
| | 30～31日 | バックホーを使用し、表土除去を実施する。30日から作業員を導入し、包含層調査を開始する。 |
| 2月 | 2日 | 公共座標及び水準測量を実施する。 |
| | 4日 | 包含層調査を終了し、遺構調査を開始する。検出された遺構は、掘立柱建物3棟、溝2条、土坑2基である。 |
| | 5～7日 | 遺構調査を継続する。 |
| | 8日 | 平面測量、航空写真撮影を実施する。教育委員会より終了確認を得る。 |
| | 13日 | 調査区の埋め戻しを実施する。 |
| | 14日 | 富山市建設部道路課より埋め戻しの終了確認を得る。その後、発掘器材の撤収を行い現場調査の全てを終了する。 |

Ⅲ 調査の成果

1 基本層序 (第5図)

調査区の東壁と西壁は、現道と耕作地との境界線と重なっており、最近までこの境界線に沿って耕作用の杭が立てられていた。遺構確認面においても、この杭を立てた時の攪乱が広範囲に確認された。また、現道の路盤工事によって遺物包含層も部分的に削平されており、出土遺物も僅かであった。

基本層序の記録は、攪乱などの影響が少ない北壁において実施した。



第5図 基本層序 (1:20)

2 確認された遺構と遺物

概要

今回の調査では、掘立柱建物3棟、溝2条、土坑2基を確認した。3棟の建物は部分的な確認のため、全体規模については不明であるが、断面観察では明瞭な柱痕が確認されている。

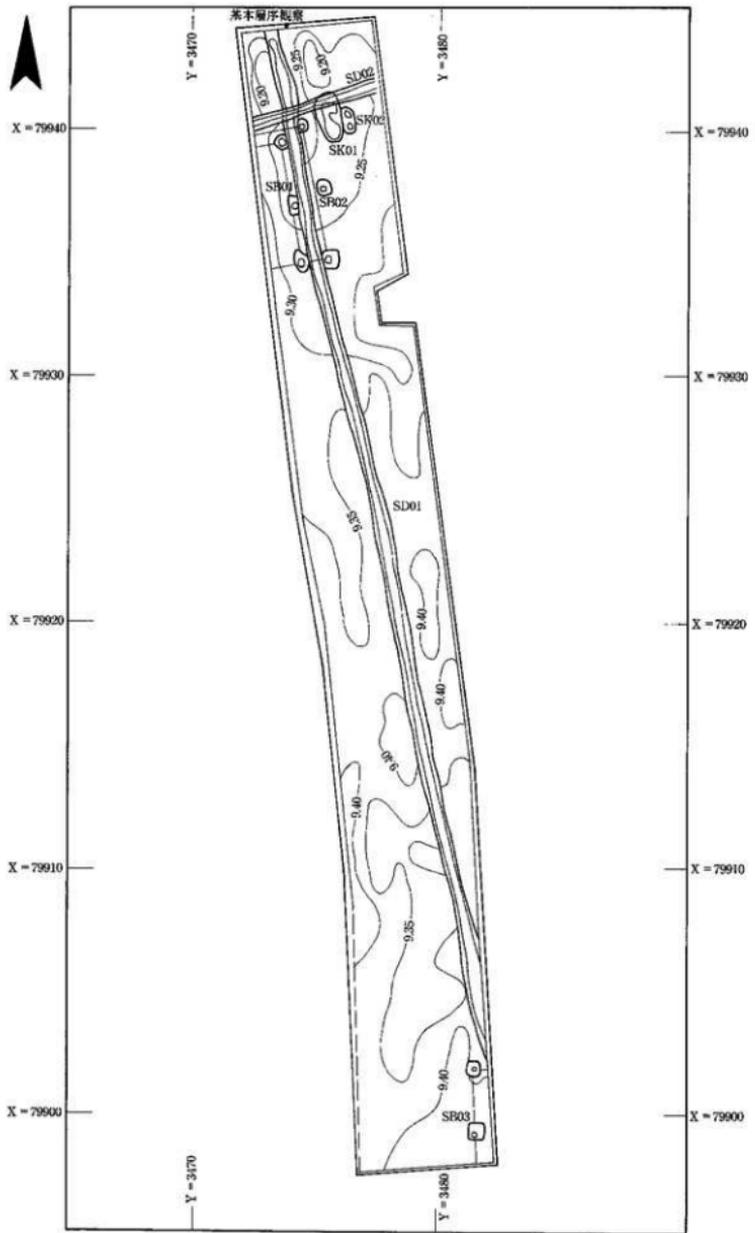
遺物は遺構内、遺構外より縄文時代晩期、古墳時代、古代、中世、近世の遺物が少量出土している。量的には古墳時代の土器が多い。

掘立柱建物

SB01 (第7図)

調査区の北側中央において検出された2間の柱列で、方向はN-10°-Eを示す。検出位置より推測すると柱列は東妻側部分に相当し、建物の主体は西方向に延びると思われる。柱掘形は略方形平面で、柱間寸法は心々で270mの等間である。柱穴規模はP1は長径75cm・短径60cm、深さ25cm、P2は長径80cm・短径70cm、深さ20cm、P3は長径75cm・短径65cm、深さ20cmである。SD01と重複し、新旧関係はSD01が新しい。

遺物は、P3より出土した1の土師器甕がある。底部片で外面にハケメを施す。

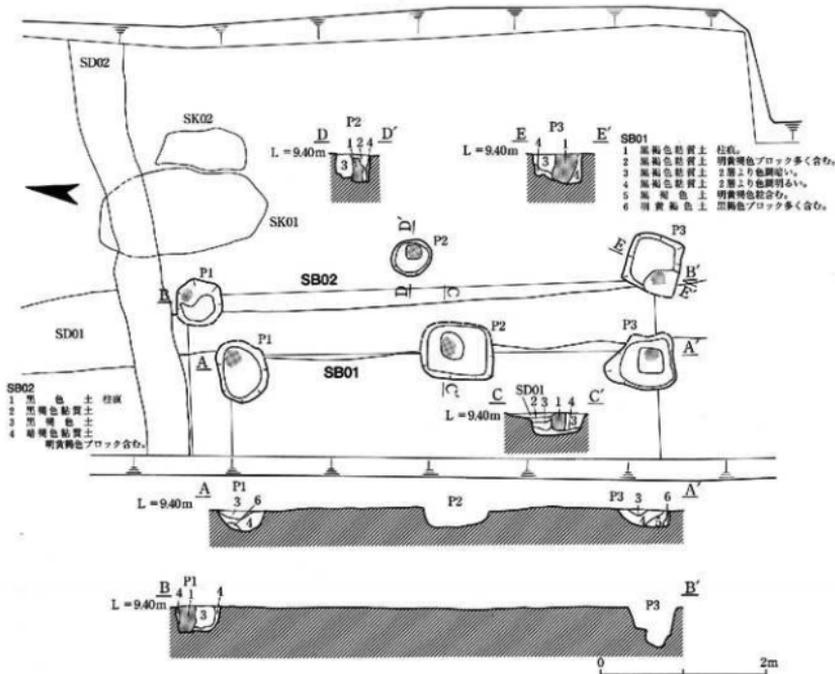


第6図 遺跡全体図 (1 : 200)

SB02 (第7図)

SB01の東端に並列する2間の柱列で、方向はN-12°-Eを示す。SD01と同様、柱列は東表側部分に相当し、建物の主体は西方向に延びると思われる。柱掘形はP1・2が円形平面、P3が方形平面である。柱間寸法は心々でP1~2は2.70m、P2~3は3.00mで、P2の柱位置は柱筋から約35cm外側に外れている。柱穴規模はP1は径55cm、深さ33cm、P2は径50cm、深さ35cm、P3は長径75cm・短径70cm、深さ35cmである。SD01と重複し、新旧関係はSD01が新しい。

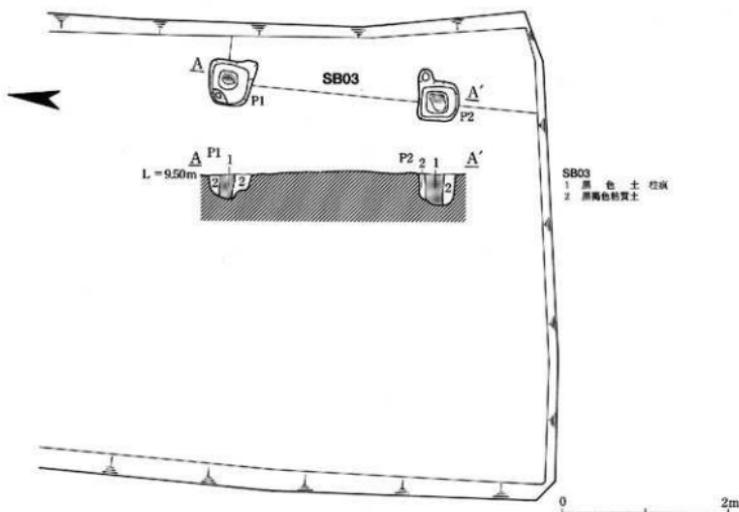
遺物は、P1より出土した2の二重口緑壺の口頸部片がある。



第7図 SB01・02 (1:60)

SB03 (第8図)

調査区の南端において検出された1間の柱列で、方向は概ね南北軸に一致する。検出位置より推測すると、建物の主体は南東方向に延びると思われる。柱掘形は方形平面で、柱間寸法は2.60mである。柱穴規模はP1は長径55cm・短径50cm、深さ30cm、P2は径50cm、深さ35cmである。



第8図 SB03 (1:60)

土坑

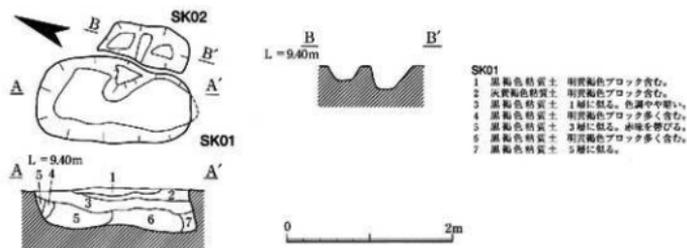
SK01 (第9図)

調査区の南側中央部に位置し、SD02に切り込まれている。平面形は隅丸の長方形で、中央部を意図的に掘り残している。規模は長径2.1m・短径1.1m、深さ45~50cmで、底面は概ね平坦である。

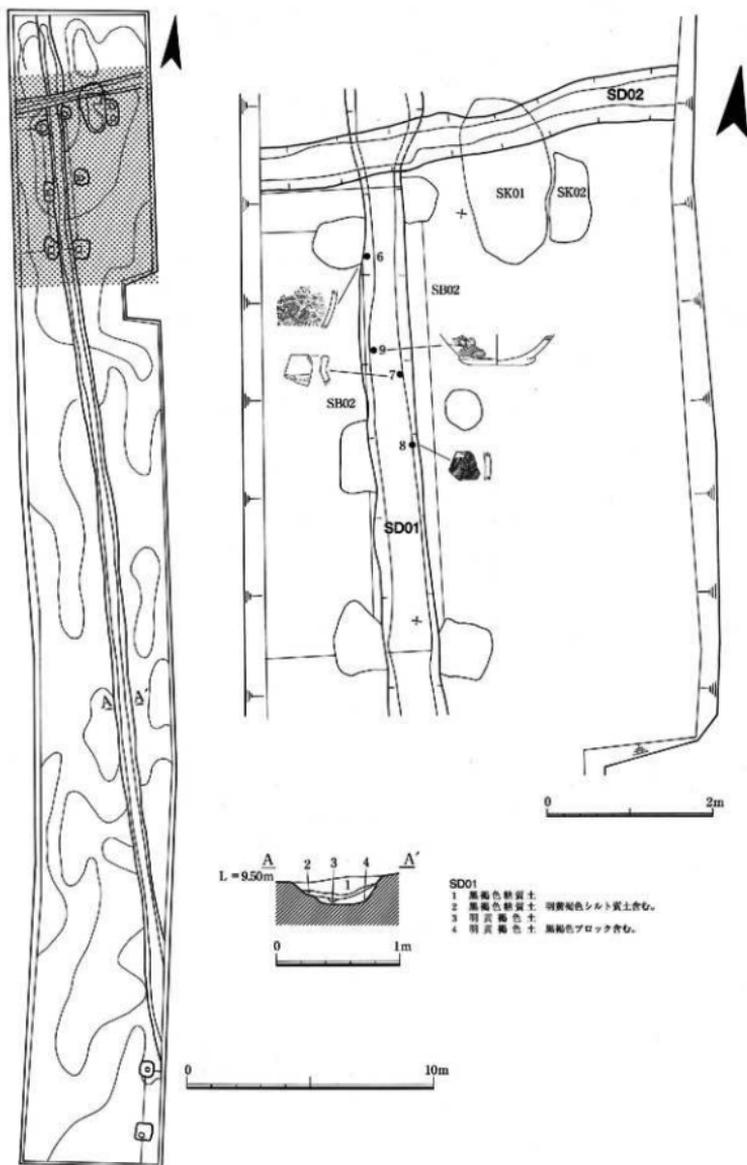
遺物は、3の器台もしくは高坏の脚部片がある。内面に丁寧に横位のハケメを施す。

SK02 (第9図)

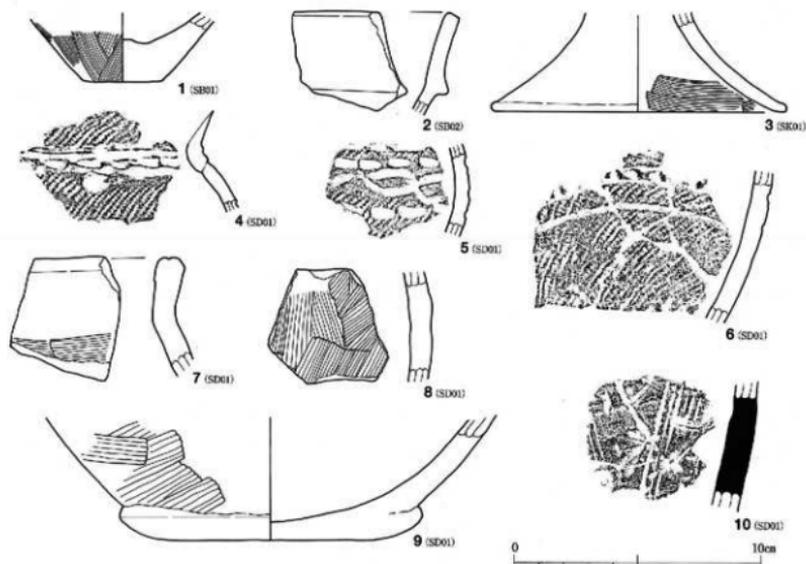
SK01の東脇に位置する。平面形は略方形で、柱穴2基が連結した形である。規模は長径1.0m・短径40~50cm、深さ20~40cmである。



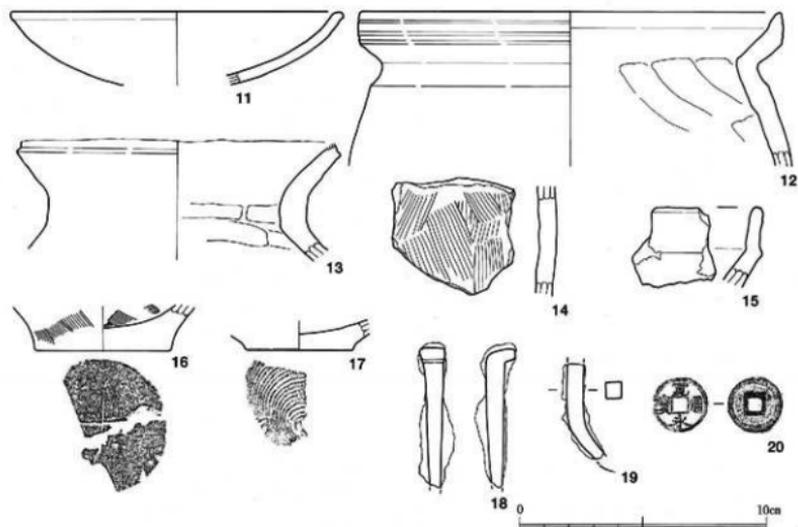
第9図 SK01・02 (1:60)



第10図 SD01・02 (1:60)



遺構内出土遺物 1 (SB01) 2 (SB02) 3 (SK01) 4~10 (SD01)



包含層出土遺物 11・12・18~20 遺構外出土遺物 13~17

第11圖 出土遺物実測図 (1:2)

溝

SD01 (第10図)

調査区のはほぼ中央を縦断する南北溝で、方向はN-15°-Wを示す。規模は確認長420m、幅70~90cm、深さ18~22cmで、南北端は調査区外へ延びている。埋土は上層は黒褐色粘質土、下層は明黄褐色土を基調とし、4層に分層される。SB01・02、SD02と重複し、新旧関係はSB01・02より新しくSD02より古い。

遺物には4~6の縄文土器、7~9の古墳時代の土器、10の珠洲焼がある。4は甕の頸部片、5・6は甕か深鉢の胴部片である。4~6は単節LR縄文の地文に鎖状の刺突文が通る。6の地文は附加条1種とも思われる。7は甕か壺の口頸部片で、外面にハケメを施す。8は甕か壺の体部片で、外面に不定方向のハケメを施す。9は壺の底部で、外面にハケメを施す。10はすり鉢で、内面に1単位20cm・8目の卸し目を引く。

SD02 (第10図)

調査区の北側において確認された東西溝で、SD01に直交している。規模は確認長55m、幅50~70cm、深さ7~10cmで、東西端は調査区外へ延びている。SD01、SK01と重複し、新旧関係はSD01、SK01より新しい。

3 遺構外出土の遺物 (第11図 図版4)

11から16は古墳時代の土器、17は平安時代の土器、18・19は鉄製品、20は銅銭である。11は器台の坏部であり、外面に僅かな赤彩が観察される。12は甕である。口縁部に形骸化した擬門線、内面にヘラケズリを施す。13は壺である。内面にヘラケズリを施す。14は甕か壺の体部片で、外面にハケメを施す。15は甕の口頸部片である。16は壺の底部片で、内面・外面にハケメ、底部外面に「+」のヘラガキを施す。17は坏の底部片で、切り差しは回転切りである。18・19は鉄製の釘で、18は近世まで見られる形状である。20は江戸期の「寛永通宝」で、計測値は径22cm、重さ30gである。

IV まとめ

今回の調査区は、平成12年度調査区の南側240mである。調査の結果、掘立柱建物3棟、土坑2基、溝2条が検出された。

各遺構の時期は、出土遺物が少なく断定は困難であるが、今回調査した限りではSD02を除き古墳時代前期頃と考えられる。また、新旧関係については、重複関係より古い順にSB01・02→SD01→SD02、SK01・02→SD02であることが判明している。

百塚住古遺跡では、平成12年度の調査によって奈良・平安時代を中心とした掘立柱建物、土坑、溝等が確認されているが、今回の調査により新たに、それに先行する古墳時代の集落の一端が確認された。また、前回の調査に引き続き縄文時代晩期の土器が出土しており、近くに同時代の遺構が存在している可能性が高い。

遺構

SD01は、調査区のはほぼ中央を縦断する南北溝で、平成12年度に調査されたSD01と繋がることが確認された。

掘立柱建物は3棟として取り扱ったが、全体を検出したわけではなく横列等の可能性もあるが、柱掘形の形状と底面の窪み(上部荷重痕)より判断し掘立柱建物とした。

S B 0 2 の柱列は東妻側部分と考えられ、中央柱は妻側面から約35cm外側に建てられている。この状況から推察すると当建物は、屋外の近接棟持柱建物の可能性がある。屋外棟持柱建物は、その平面形式上の特徴である建物の妻側面から離れた位置に柱を建て、切妻屋根先端の棟木を地面から直接支持するものであり、弥生時代の銅鐸や土器線刻面に表現される様に、主として高床建築に見られるものとされる。しかし、棟持柱建物は高床建築に固有のものではなく、平屋建物にも少数ながら存在すると言う。仮に当建物が、一般に認識されている屋外棟持柱建物とするならば、その構造上の特性から他の建物と差別化を図るものであり、集落内においてシンボリックな建物と推察される。

遺物

今回の調査では、断続的ではあるが縄文時代から近世までの遺物が出土した。

縄文土器の4～6は、早館LR縄文の地文に鎖状の刺突文や沈線が施されており、縄文時代晩期の「中屋式」と考えられる。

古墳時代の遺物の大半は前期を中心としたものと考えられ、13は漆町編年7・8群、15は7群土器に比定される。12は口縁部に形骸化した擬凹線が施されており、13とはほぼ同時期の所産と思われる。

中世では10の珠洲焼がある。すり鉢の体部片で、1単位20cm・8目の卸し目を中太の櫛歯器具により施している。吉岡編年のIV2期であろうか。

近世では20の「古寛永」がある。鋳造年代は、文字形態・計測値より1様式の1636～1659年頃である。

引用文献

- 富山市教育委員会 1998 『史跡北代遺跡発掘調査概要Ⅱ』
- 富山市教育委員会 2001 『富山市古塚住吉遺跡発掘調査報告書』
- 宮本長二郎 1996 『日本原始古代の住居建築』中央公論美術出版
- 吉岡康晴 1994 『中世須恵器の研究』青川弘文館
- 川根正教 1996 『出土銭貨』第5号 出土銭貨研究会
- 田嶋明人ほか 1986 『漆町遺跡Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター



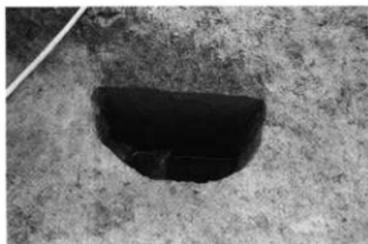
調査区透景 (空撮)



調査区域 (空撮)



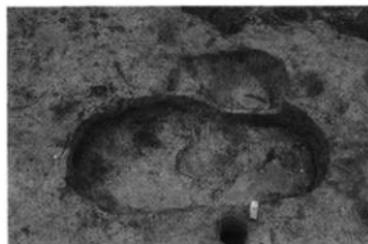
調査区全景 (南から)



S B02-P2 (南から)



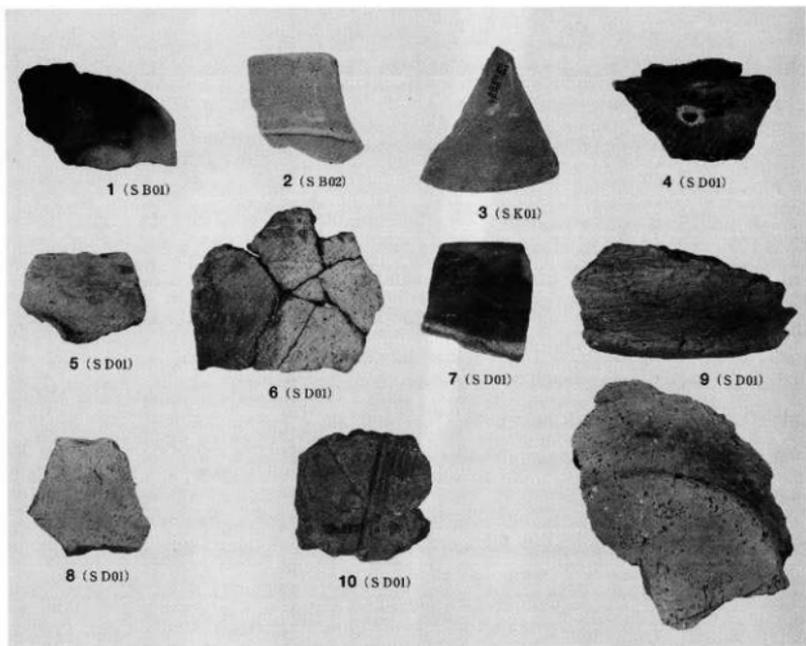
S K01断面 (西から)



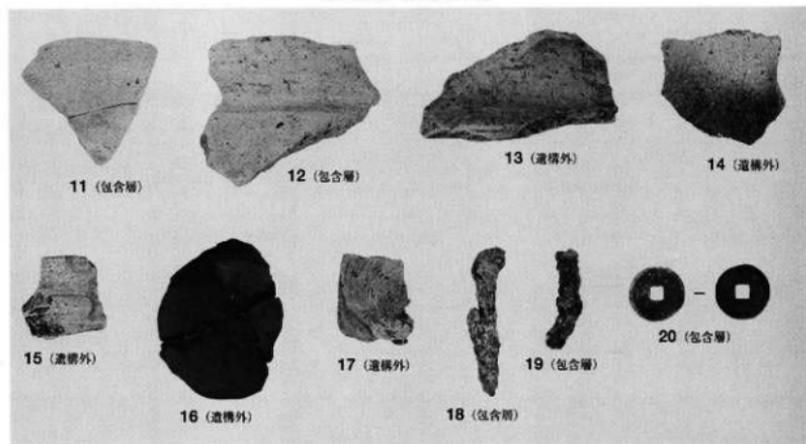
S K01 (西から)



S D01遺物出土状況 (北から)



遺構内出土遺物 (1:2)



遺構外出土遺物 (1:2)

抄 録

ふりがな	とやましひやくづかすみよしいせきはっくつちようさほうこくしょ							
書名	富山市百塚住吉遺跡発掘調査報告書							
副書名	市道宮尾6号線道路改良工事に伴う縄文文化財発掘調査報告							
巻次	(2)							
シリーズ名	富山市縄文文化財調査報告							
シリーズ番号	123							
編著者名	棚谷優 小村正之 吉川知明							
編集機関	有限会社 山武考古学研究所							
所在地	〒286-0045 千葉県成田市並木町221番地 TEL. 0476-24-0536							
発行機関	富山市教育委員会 縄文文化財センター							
所在地	〒930-0803 富山県富山市下新本町5番12号 TEL. 076-442-4246							
発行年月日	西暦2002年3月15日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
百塚住吉遺跡	富山市宮尾	16201	187	36度 43分 13秒	137度 12分 20秒	20020129 20020315	240㎡	市道宮尾6号線 道路改良工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
百塚住吉遺跡	集落跡	縄文				縄文土器		
		古墳		掘立柱建物跡 土坑 溝		3棟 2基 1条		
		奈良・平安		溝		1条		
		中世				土師器・須恵器・鉄釘・ 釵等		
		近世				珠洒焼 鋼鐵		

富山市埋蔵文化財調査報告 123

富山市百塚住吉遺跡発掘調査報告書

— 市道宮尾6号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告② —

2002年（平成14年）3月15日発行

発行 富山市教育委員会埋蔵文化財センター

〒930-0803

富山市下新本町5番12号

TEL 076-442-4246

FAX 076-442-5810

E-mail maizoubunka-01@city.toyama.toyama.jp

編集 有限会社 山武考古学研究所

千葉県成田市並木町221番地

TEL 0476-24-0536

印刷 株式会社 文化総合企画

千葉県印旛郡富里町日吉台1-23-12

TEL 0476-93-0593

